



ほっかいどう学新聞

第22号
2026 春号

大人気! 赤れんが庁舎で北海道の近代インフラ史を知る

耐震補強などの改修を終え、令和7年7月にリニューアルオープンした北海道庁旧本庁舎(赤れんが庁舎)。



「一般使用できる赤れんがホールでの企業セミナーやパーティ開催も盛んで、これまでに増して充実しています」と語る奈良さん。北海道フービーフェスティバル2025では階段のレッドカーペットが演出効果抜群だったそうだ。

俊英が北海道に集結
赤れんが庁舎は、明治21年(1888)生まれ。令和7年(2025)7月、約6年に及ぶ改修工事を終えて生まれ変わった。重厚な雰囲気の中で料理やお酒を味わえるレストラン、スイーツを楽しめるカフェができた。展示も一新し、北海道の歴史、自然、道内全市町村の特産品などがデジタル技術を駆使して紹介されている。

北海道総務部イノベーション推進局財産活用課課長の奈良華織^{かおり}さんはこう語る。「赤れんが庁舎は、3回、大きな改修を経て引き継がれてきました。①明治42年(1909)に内部が全焼した後の復旧、②昭和43年(1968)の北海道開基100年の復原改修、③令和の改修です。令和の改修は、北海道命名150年を機に北海道の歴史文化を見つめ直し、赤れんが庁舎を未来へつなぐことを目

北海道庁旧本庁舎(赤れんが庁舎)が大人気だ。シンボルの八角塔に登れるようになり、カフェやレストランが新設され、展示も一新。令和の大改修完了後、1カ月足らずで入館者10万人を突破した。魅力あふれる赤れんが庁舎だが、その存在自体が、北海道のインフラ整備を切り開いたこととはあまり知られていない。赤れんが庁舎とインフラ史の深い関係を見てみよう。

NOTICE

ほっかいどう学 前進中!

① 第13回ほっかいどう学連続セミナー釧路開催報告

令和7年12月6日、北海道教育大学と北海道開発局との連携協定を契機に、北海道教育大学釧路校において第13回ほっかいどう学連続セミナーが開催されました。



パネルディスカッションで発言する釧路教育大生(舟生蒼子さん・大戸玲穂さん)。地域資源を題材にした学びの成果を語った。

基調講演では、北海道教育大学特任教授(前副学長)の玉井康之氏が、次期学習指導要領の柱である「探究」と「主体的な活動」に触れ、地域に出て課題を見つけ、社会と結びつけて学ぶことの重要性や地域資源への「気づき」が、子どもたちの誇りや自己肯定感につながるなどの考えが示されました。パネルディスカッションには、玉井康之氏、玉井慎也氏、北海道開発局の大泉勝裕氏、教育大生の舟生蒼子さん、大戸玲穂さんが登壇。釧路湿原でのフィールドワークや教材制作の取組が紹介されました。議論では、「一本の牛乳」を例に、港湾や道路、国際物流と地域産業が暮らしを支える構造が語られるなど、身近な題材から地域と世界を結ぶ学びの可能性が示され、連携協定を起点とした実践の広がりを実感する機会となりました。

② 小・中・高・大×開発局×NPO 連携広がる!!

釧路での教育大学との連携事業をはじめ、ほっかいどう学の取組は、小学校に加え、中学校・高校・大学へと広がっています。人口減少や担い手不足が進む中、学校が地域と連携しながら探究的な学びを進める動きが各地で進んでいます。

中学校では、厚沢部での地域交流会において、生徒が「道の駅」を核とした地域活性化ビジネスをプレゼン。子どもたちの挑戦を大人が真剣に受け止める議論が展開されました。高校では、「オホーツク管内高等学校探究学習研修会」や地域交流会 in 帯広(詳細は同封の記事参照)が開催され、当法人もサポートをさせていただきました。また、遠隔授業配信センター(T-base)との連携による、地域資源を題材とした授業配信もスタートしています。オール北海道での広がりが見え始めています!

※最近の活動の様子は、ほっかいどう学HP(QRコード)からご覧ください。→

会員募集中 一緒に「ほっかいどう学」を創りましょう!

ほっかいどう学を応援してくださる皆さま、ぜひ、当法人へのご入会をご検討ください。会員の皆さまには、この「ほっかいどう学新聞」を郵送でお届けするとともに、各種情報(セミナーやインフラツアー開催案内等)をメールにて最速でお知らせします。ご入会の案内は右のQRコードよりご覧いただけます。



ほっかいどう学新聞 第22号 2026年3月16日発行

発行人/新保元康、編集人/北室かず子、編集スタッフ/原文宏 宮川愛由 森希美、デザイン/スタジオコロロル
発行所/認定NPO法人 ほっかいどう学推進フォーラム 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL(011)738-3363 FAX(011)738-1889 URL https://hokkaidogaku.org E-mail info@hokkaidogaku.org



(上) 明治19年夏の鈴木煉瓦製造場。道庁への納入記念に撮影されたと考えられている。北海道大学附属図書館所蔵



(左) 明治20年頃の鈴木煉瓦製造場。背後に登り窯が写っている。札幌市公文書館所蔵

よって人口を定着させること。石炭を筆頭とする北海道の資源は、日本の工業化、近代化の燃料となった。駒木さんは煤田開採事務係の背景を調べた結果、「中央の技術者に比肩する待遇で、圧倒的エリートが揃っていました」と断言する。平井ら米留学経験者のほか、東京大学、工部大学校、札幌農学校で最先端の実学を修めた俊英が、北海道に集結していたのである。

平井は幌内鉄道の橋脚や建物をれんがで建設した。れんがは堅牢な上、蒸気機関車の火の粉がかかっても耐火性に優れている。これらの築造には、当初、東京にある東京集治監で焼かれたれんがが使われた。しかし、れんがを東京から運ぶのはコストがかかりすぎる。ちょうどこの頃、札幌郡白石村（現 札幌市白石区）で、れんがに適した粘土が発見された。そこで、東京の小菅でれんが製造

鈴木煉瓦製造場の写真は壮観だ。巨大な登り窯、無数のれんがが干され、職工の長屋などが並ぶ。現・白石区本通8丁目南9丁目南付近に本工場を、現・JR白石駅付近に分工場を、月寒にも分工場を設け規模を

インフラ整備を担ったれんが

れんがの数、約250万個にも上る。そのほとんどが明治19年（1886）と20年（1887）に鈴木煉瓦製造場と、同じく白石村の平煉化場で製造された。

北海道では冬場、れんがを干せないため、年中生産できる本州産より割高にならざるをえない。豊三郎も「本州産れんがの移入を防げば、北海道のれんが事業も先行き心強いが、防げ

ないのはたいへん残念である」とも北海道タイムスに語っている。

れんがという資材が地元で供給され始めたことで、北海道のインフラ整備は劇的に進んだ。そのきっかけは、鈴木煉瓦製造場の創設を後押しした平井である。ということは、赤れんが庁舎の建設が北海道の近代インフラの扉を開いたと言ってもいいのではなからうか。

赤れんが庁舎の壁を見ると、れんがの長手と小口が交互に積みまれていることがわかる。「長、短、長短」のリズムが感じられ、華やかな印象だ。これをフランス積みという。一方、同時期の日本に多いのがイギリス積みだ。これは「長手だけが連続で現れる段」と「小口だけが連続で現れる段」が重なる積み方で、堅牢で効率良く積める。

興味深いことに、平井はこの2種類の積み方を使い分けた。機関車庫三号や赤れんが庁舎など建築物はフランス積み、鉄道の橋など土木構造物はイギリス積



赤れんが庁舎の設計を指揮した平井晴二郎。鉄道博物館所蔵

的としています」。そのために行われたのが次の対策だ。れんが壁の中に穴をあけ、175本の鉄の棒を入れて耐震補強が施された。屋根の天然スレートと銅板の葺き替え、天井のメタルシーリングの補修、再取付、換気塔・煙突の補強と落下防止、八角塔の補強、小屋裏のスプリングラー設置、地階から2階までのエレベータ設置などだ。指定管理者制度が導入され、北海道新聞社を代表者とする北海道赤れんが未来機構が運営を担うことになった。オープン前から公式Instagramにより積極的な発信を行い、新聞広告や地下歩行空間で展開された

平井は加賀藩の下級武士の家に生まれ、明治維新後、文部省の第1回留学生に選ばれて米国へ渡った。レンセラール工科大学で平井は

スタイリッシュな広告も注目を集めた。プレオープンにはインフルエンサーが招かれ、館内を自由にめぐってそれぞれの視点でPR。このように令和流にアップデートされた情報発信は、人々の心をつかんだ。奈良さんいわく「リニューアル前の入館者は年間約70万人でした。リニューアル後、有料（300円）となり、他施設の例では入館者が70%ほどに落ち込むようですが、1カ月足らずで10万人を突破しました。年間入館者数は、無料だった時と同程度に達すると見込んでいます」。赤れんが庁舎の設計を指揮したのは、平井晴二郎である。

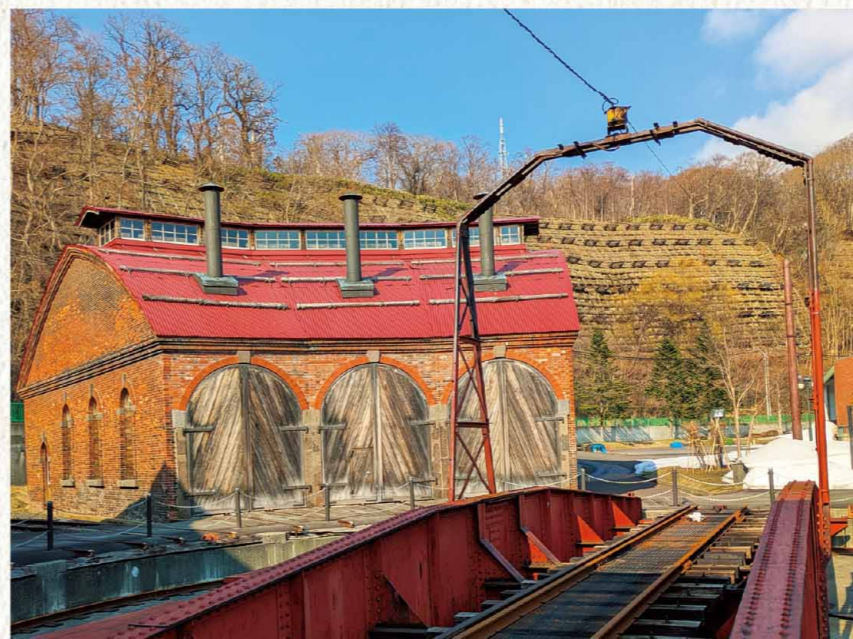


小樽市文化財審議会会長でもある駒木さんは日本遺産「北海道の「心臓」呼ばれたまち・小樽〜「民の力」で創られ蘇った北の商都」認定に尽力。令和7年小樽市功労者受賞（自治振興部門）。

土木工学（Civil Engineering）を専攻。Civil（市民の）Engineering（工学）の言葉通り、社会の基盤整備を担う学問だ。帰国後、開拓使に就職し、煤田開採事務係に配属。「煤田開採」というと炭鉱そのものをイメージするが、平井が担当したのは、北海道初の鉄道である幌内鉄道の札幌〜幌内間の建設だった。

「ヤマ（炭鉱）を買うなら、道を買え」という言葉がある。炭鉱と石炭の消費地は遠く離れていることが多いため、炭鉱経営の要は輸送だというのが。幌内鉄道も石炭輸送のためだった。軟弱な地盤の湿地帯が広がり、豊平川や千歳川を越える架橋も必要な難工事だった。敷設を終えると、小樽の手に煉化石造機関車室（現・

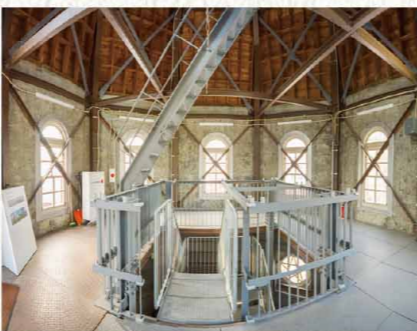
機関車庫三号）も設計し、明治18年（1885年）に竣工した。平井の足跡を調べるためにレンセラール工科大学にまで赴いたのが、北海道職業能力開発大学の特別顧問で工学博士の駒木定正さんだ。駒木さんは機関車庫三号を「邦人の学卒者が設計した現存する最古級の建物とみられます」と語る。それまでの洋風建築やれんがが建築の設計者はお雇い外国人だったり、見よう見まねで建てた（それ自体、卓越した知力と技術だが）大工棟梁だった。だが、機関車庫三号は大学の課程を修めた日本人による最も早い時期の建物というわけだ。細分化した現代では考えられない



小樽市総合博物館本館に現存し、見学できる機関車庫三号。手前は転車台。



絵画が掲げられた赤れんが庁舎は美術館のようだ。20点は、昭和44年、赤れんが庁舎が国の重要文化財に指定されたことを記念して、北海道ゆかりの著名画家に北海道が依頼したもの。

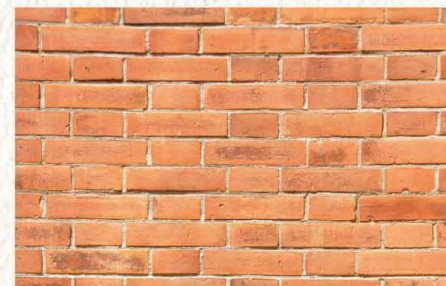


間近で見る八角塔と内部。

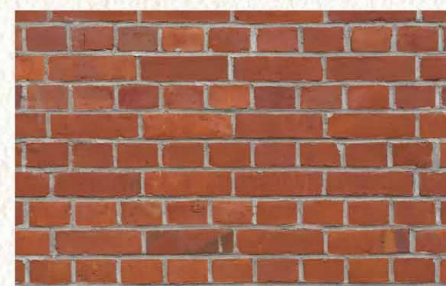
「札幌間道路の開さく(一木万寿三・画)」には、札幌小樽間の石狩湾に面した断崖に幌内鉄道敷設の前段階

2階の「入植地の測設(亀山良雄・画)」は、大木やササが茂る原野に分け入って、移住者1戸に与えられる1区画(約5ha)を測量する様子だ。ヒグマやオオカミに怯え、蛇を振り払いながら、懸命に大地を測った人々の汗によつて、今につながる地割が定められた。

造物でありながら今年1月、国の重要文化財に指定された。廣井は卒業後、煤田開採事務係で平井の下で実務を経験し、アメリカ、ドイツなどに渡つて技術を修得したのである。



フランス積みのれんが。オランダ等ベネルクス3国と北フランスを含むフランドル地方の積み方なので、正しくはフランドル積み。

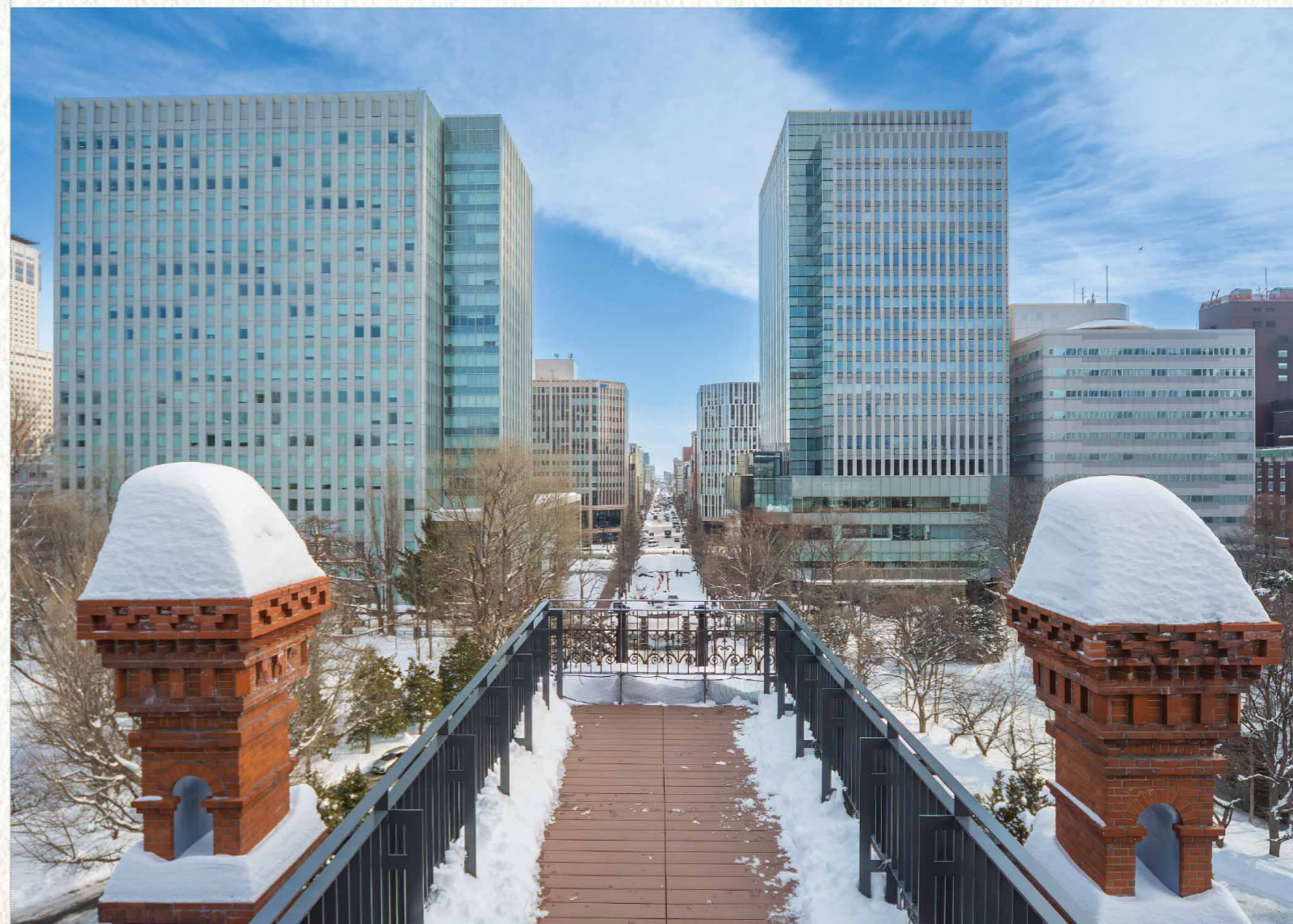


効率よく積めて堅牢なイギリス積みのれんが。

絶景も絵画もインフラ史

令和の改修後は、これまで立ち入り不可だった八角塔に入れるようになった。八角塔からバルコニーに出ると絶景が目飛び込んでくる。林立するビルの中で、北三条通の上だけ一直線に空が開いているのだ。改修前も2階の長官室から北三条通は見られたが、高さが格段に違う。位置も北三条通が真正面に延びている。かつて北三条通沿いには開拓使工業局や麦酒醸造所などが並び、少し南に目を転ずれば開拓のための人材を育成

した札幌農学校があった。北三条通は開拓を象徴する都市軸なのだ。また、令和の改修で、開拓を描いた名画20点を常に鑑賞できるようになった。以前は会議室等に掲げられた作品は見られなかったのだ。片岡球子や岩橋英遠、小川原脩など北海道ゆかりの画家たちが筆を揮った。その中にインフラ整備に直結するものが5点もある。地下1階に掲げられた「小樽港の築港(松島正幸・画)」は、日本初の外洋に面した本格的防波堤である小樽港北防波堤の築造を描いたもの。北防波堤は、札幌農学校二期生で土木工学の泰斗である廣井勇が築いた日本近代土木の金字塔だ。土木構



八角塔のバルコニーから見た北三条通。八角塔観覧料は1,200円で、オンラインチケットもしくは当日館内窓口で申し込みが必要です。

子どもたちにココも伝えたい

イランのニュースが毎日続きます。このイランの一部も含む古代メソポタミア文明こそが1万年ほど前にれんがを生んだと言われています。当時のれんがは、泥を固めた日干しれんがでした。大きさは今と変わらず、片手で握ることのできる統一規格。これによって効率よく大きな建物やインフラを作ることができたのです。一方、地震が多く、豊かな森に恵まれた我が国では木造が主流。西洋に追いつけ追い越せと奮闘した明治の最前線北海道。ここに赤れんが庁舎が生まれました。つまり、ここには歴史が全部詰まっているのです。

小学校6年の歴史学習をこのように身近なれんがやイランのニュースにつなげてスタートするのも子どもの興味を引くのではないのでしょうか。そして、国の重要文化財さらには北海道遺産でもあり、リニューアルしたばかりの我々が赤れんが庁舎を話題にスタートしてもいいのです。歴史学習のネタは、私たちの身の回りどこにでもあることを子どもたちに伝えたいものです。

子どものときに聞いた忘れられない先生の小話が誰にもあります。小話の教育力恐るべし！働き方改革で生まれた時間を使って知の旅に出かけ、子どもたちにワクワクする小話をしてあげたいですね。まずは、リニューアルされた赤れんが庁舎にレッツゴーです。

理事長：新保 元康
(元札幌市立小学校校長、専門は社会科)



として道を開く難工事が描かれている。お雇い外国人ジョセフ・U・クロフォードの指揮の下、最新機器のトランシットで測量する洋装の技術者と、法被に脚絆姿で岩を切り出す作業員が協力し合っている。

「札幌本府の建設(岩船修三・画)」に登場するのは、寒気迫る明治2年(1869)11月、札幌を北海道の都と定め、縄張りを始める開拓判官・島義勇だ。二面の雪原に、札幌という都市の胎動が響き始める。そして「石炭をはこぶ(菊地精二・画)」には石炭を積み込む半裸の男たちと蒸気機関車が描かれている。「小樽港の築港」と合わせて鑑賞すれば、まさに日本遺産「炭鉄港」。「炭

鉄港」とは、石炭・鉄鋼・港湾とこれらをつなぐ鉄道からなる、北の産業革命の物語だ。れんが庁舎には北海道インフラ史が凝縮している。デジタル技術で臨場感が増した展示とともに、れんが、絶景、絵画が語る歴史を探索してみたいかがだろう。

文/北室かず子

(※)築造当初は木造だったが、幌内鉄道敷設の日本人技術者のトップで平井のレンセラー工科大学の先輩でもある松本荘一郎の提言でれんがに造り直された。